



# ドラゴンは まどうしのしもべ

---

遍織

---

## 急造船

---

急造船には冷凍室とパイロットを乗せる場所しかなかった。少年は惑星へ帰る船の光が消えると、日常を続けるために家へ戻った。同じ時間に眠り、同じ時間に起きて、同じ言葉を話した。「おはよう、ママ」人にはプログラムし直すだけの時間がなかった。悲しむための心を与える時間も。

## 真空に棲む生き物

---

真空に棲む金属の生き物たちは断絶する互いの空隙を埋めるべく冷たく硬い身体を寄せ合い、温もりの代わりに互いの振動を交換した。時の始まりとともに生まれ、放たれ、今も変わらず続くその叫びにも似た振動が、生き別れの兄弟のように己の中で再び出会い、響き合うのを聴くために。

## 愛の言葉

---

生命活動の気配を辿り地球に着いた彼らは、交流を開始するべく地上の幾千の言語を読解したが、見つからない誤解なき愛と信頼の言葉を探して未だ軌道上を回り続けており、彼らの通信網から漏れ出した言葉がときおり地上に降り注いだ。ジュテーム、アイラブユー、月が綺麗ですね。

## 流れる星

---

三年ぶりに生きた人間を見た。しかもそれは女だった。女は恋人の死体を探して地球の反対側へと旅しているのだと言った。かの戦争以来周回軌道を巡る幾千の残骸、その一つが大気圏に突入する刹那の輝きを掴むのだと。絶え間なく命の流れ続ける空の下、女を留める言葉はないと知った。

## 防水機能

---

「一人暮らしなんですか？　なのにヒューマノイドの一つも持たないなんて」いつもは苦笑だけ返す彼が、なぜかこの時は私を家に招待してくれた。そこにはシリカゲルに埋もれたロボットがいた。「もう十年になる。……旧型には防水機能がなかったんだ」私にはかける言葉もなかった。

「最近心の不具合を訴えるものが増えて困るよ。え、治療？ パーツの全交換に決まってるさ。心なんて何だろうと機能に変わらないんだから。ここは情報の中継基地なの。通り過ぎるだけの。全体をうまく統制し動かすには、どうしてもこのパーツが必要だった、ただそれだけのことだよ」

## バレンタインに甘いプレゼント2

---

「りさサン、何ヲ作ッテルンデスカ」「バレンタインチョコよ。学校に持って行くの」（りさサンモ本命ちよこヲ作ル歳ニナツタンデスネ）「あ、ロボ、将棋の相手してよ」「ハイ」...  
...「あー、負けた!」「ドウシタンデスカりさサン、今日ハ詰ガ甘イデス」「ふふ、ならよかった」「?」



## ロマンチックな夜に

---

出兵が決まった夜は街に繰り出し、とびきり若くて可愛い女の子を捕まえる。格納庫に忍び込み、コックピットに抱えあげ、密かにコロニーの外に飛び立つのだ。帰還後同じ名前の子を探し、五十年前の戦艦乗りが見せたとてもロマンチックな夜の話をして、やっと俺の残酷な夜も明ける。

「今日一緒に遊ぶって約束したのに。ママはまた仕事なのね」〈お母様からビデオメールが届いております〉「どうせ言い訳ばかりなんですよ。ねえ、家族とレジャーランドに行った記憶売られてない？」〈あります。十歳の男の子ですが〉「それでいい。買って。じゃあね、いってきます」

「ケンジ！面白い話教えてやろうか？」「ふうん、結構いいじゃん」〈ケンジサン、今日マサルサンから聞いたお話ですが、既にライセンス登録されています〉「なんだよ、騙された」〈百円になります〉「いいよ、そんな面白くなかったから。消しちゃって」〈記憶容量から削除しました〉

## 時間

---

時間を操る能力を得て、あなたを理不尽な死から救い出そうと、何度も過去に遡りその度失敗した。温もりの失われていく身体をかき抱いて、不可避な運命へ収束していく時間を分割する。閉じていくあなたの瞼の動きが次第に鈍くなり、ほとんど止まった世界は、永遠と見分けがつかない。

「いかなるものも、私の心を穢すことはできない。どんな責め苦も私の高潔な魂には届くことはない」「そりゃあそうだ。おまえはこの肉体の主じゃない、ただ感覚を盗み取っているに過ぎない、白い棺桶の中で寝そべったままの、肺に本物の空気を満たしたことすらない、幽霊なのだから」

## 勇者パーティ

---

「みんな今まで有難う。冒険の道半ばで心苦しいが、一身上の都合でパーティを抜ける」「一身上の都合って？」「結婚、とか」「パーティの仲間？」「いや、一般人だ」「裏切り者！」「冒険だけが人生じゃないんだ！俺にだって生活があるんだ！それじゃ！」勇者はログアウトしました。

## 不穩の種

---

不穩の種を大地に撒いた。芽吹いた苗は水と養分を吸い上げながら、大地が乾ききるまですくすく育った。水を奪い合って人々が争い大地に血が流れると、作物は血を吸ってさらにすくすくと育った。実りの秋を迎え、作物を刈り取った人々はそれを売って武器に変え、肥料を奪いに行った。

## 執着

---

この間あんたを探している男が来たよ。あれほど探し求めているのに、可哀想にやつにはあんたが見えない。影を追い、薄い香水の香りを嗅いで、温もりを自給するしかない。可哀想にあんたはあの男の執着によって生かされているんだ。あんたが本当に存在するかどうかはわからないがね。



## 洋館にて

---

黴と埃のにおいに満たされた古びた洋館の来歴も、振り子時計の胴体に隠された秘めたる日記も、玄関ホールの階段に飾られた悪魔のように美しい肖像画も、もうどうでもいい。腐ったワインで舌と唇を湿らせ、君の干からびた手に口付けよう。それで十分だ。おやすみ、そして、さよなら。

## 砂時計

---

空になるのに一日かかる巨大な砂時計を、日に一度ひっくり返すのが彼の役目だった。砂が流れ落ちる間だけ、時が流れる。時の流れる限り自分にも終わりがあるのだと悟ったとき、彼は永久機関を作った。死ぬ代わりに血をわけた新たな命を生み出せる生き物。その血潮に時の砂をまぜた。

## 夢日記

---

夢を見ないので、架空の夢日記を綴り続けていたところ、次第に白昼夢と見分けがつかなくなり、書きながら夢見ることが可能になったが、あるときなぜか日記が消えてしまった。あらゆる引き出しをひっくり返してから、気づく。わたしは慌ててベッドに飛び込み、日記を急いで綴った。

## 悪魔

---

北の灯台の地下には胴体が、南の暗礁に沈む船に脚があり、西の塔の上に首、東の山の頂上に腕が隠してある。すべて集めて縫い合わせると悪魔になり、おまえの願いを叶えてくれる。ガーゴイルの彫像に突っ込まれた肉々しい舌がそう教えてくれたから、自分の首を刳って塔の上に隠した。

## 合体

---

スライムは仲間を呼んだ！スライムB～Hが現れた！？？なんと...B「ちょっと待て、合体前に意志を統一しよう。俺はメラミがいい」G「最初はのしかかりだろ」A「じゃ多数決で.....のしかかりに決定！」スライムたちが合体してキングスライムになった！キングスライムは逃げ出した！

## 孤独

---

孤独に耐えかねて柔らかな皮膚に牙を突き立て、神経を接合し意識を接続し血肉を連結したその生物は、膨れ上がった肉体を見下ろし、ほんの刹那の間自分を満たした感情の残滓に憧憬を募らせ、新しい手足を動かして孤独を癒してくれる同類を探し、牙のない唇で報われない試み続ける。

## とんがり帽

---

とんがり帽の下、赤い唇を覗かせた魔女の素顔は斧に引き裂かれて永遠の謎となる。掘み出された心臓はハート形で、同じ形のチョコレートは血の味がした。惚れ薬のレシピは魔女が書いた。その矛盾は男を赤い唇の虜にし、娘を発狂させた。彼ら子孫は今でも帽子の下の狂おしい夢を見る。

## ドラゴンはまどうしのしもべ

---

ドラゴンはまどうしのしもべ。まどうしはドラゴンにことばをおしえる。まどうしのいのちはみじかい。ドラゴンのいのちはながい。ドラゴンはおろかだ。ドラゴンはことばをりかいけない。ドラゴンがまどうしのことばをとる。ひとびとはことばをしり、ドラゴンはすべてをくろう。



## 奪われたもの

---

男の家は温められている。灯りと美味しい料理が彼を待つ。だがそこには彼しかいない。かつて男には妻がいた。男の狩猟の腕に嫉妬した神が腹いせに奪った女が。押し寄せる悲しみは不可視の温もりによって癒される。男には行為のみが残されている。彼は妻の名を思い出すことができない

## 湖に沈んだ娘

---

十の年に湖に沈んだ娘が網にかかった。それでわたしは湖で漁してはならない理由を理解した。娘を連れ帰り妻にする。初夜の日に身体を開いた娘にわたしは溺れた。娘は翌日妊娠した。既に誰の目にも明らかな程腹が膨れていたという。そしてわたしは父のいない子として産み落とされた。

## 片割れ

---

神の名を知らぬ冒涇を暴かれたとき、彼はそれが誰の名であるかを知った。嬉しいときに感謝し、苦しいときに縋る、あらゆる想いととも呼び続けた彼だけの特別なまじない言葉。失われた肉体以外のすべてをわかちあうために両親が彼に教え込んだ、墓所で待つ、間引かれた片割れの名。

## 停戦協定

---

踏み躪られた幾度の停戦協定を経て、各種族の長は鋭い牙も爪も硬い鱗も毛皮も俊敏な足も空飛ぶ羽根もない、無毛の柔らかな肌を露わにした同じか弱い姿をとる条件の元極東の都に集った。悦楽にのみ特化したその姿で美酒美肴に酔い、互いにまぐわいあう間世界は束の間の平和を謳歌する。

## 言葉を知らない

---

言葉を知らない恋人たちは裸で熱砂の砂漠に身を投げる。白い手足が蛇のように絡みあって、砂の中を泳ぐように上へ下へ。丸く溶け合った身体は、ひとつの蠢く塊となって、あの大きな怪物を誘き寄せる。皮の焼ける香ばしい臭い。悲劇の臭い。互いを踏みつけあい空気を求める恋人たち。

## けがれなきこども

---

姫はとても怖がりだ。悪い夢を見ては泣き、暗がりに怯え、私の足元に縋りついて震える。「最近庭師の男の子の姿が見えないの。きっと悪者に攫われて四肢を斬られ木に縛り付けられて飢えて苦しんでるわ」なんてか弱く純粋な姫だろう。すべての穢れから守ると、私は決意を新たにする。

## 新年 1

---

「明けましておめでとう」初めて一緒に年越しした彼氏に、零時になると同時にキスされた。照れ笑いして、顔を見合わせる。「初めてのキスなの……」「え……ほんと？」驚きつつも嬉しそうな彼に、わたしも嬉しくなる。もちろん、今年初めてって意味だけど。

## 新年 2

---

時計の針が23:59を指したまま動かない。今年やり残したことがあるんだ。彼女のアパートに急ぐ。突然の訪問に驚く彼女にお礼をするけど、うまく言葉にならない。来年もよろしくね。その言葉に答えることなく僕は暗い道を歩き始める。来年は多分もう来ないんだろう。僕の元には。



## ツイリアル

---

僕人形焼が可哀想で食べられないんです」「えっ」「子供の頃食べようとする親父が『イタタ！』って叫んで、以来顔のある食べ物がトラウマで」「じゃあ、魚とか豚の丸焼きとかもダメ？」「それは平気です」「つまり二次元に限る」「そうです」「非実在生物に限ると」「そうです！」

## 小説について

---

「あなたの書いた小説読んだわ」「どうだった？」内心の動揺をおくびにも出さずに訊き返す。それはきみを思って書いた物語なんだよ。「とてもよかった！恋する勇気もらったみたい。今度好きな人に告白するわ」「へえ、それはよかった。上手くいくといいね」きみは嬉しそうに笑う。

## 半身

---

大学の同輩は時折胸を押さえることがあった。どこか悪いのかと訊くと、彼は幻肢痛だと答えた。太古の昔、人は二人で一体であり神の怒りに触れて引裂かれた半身が痛むのだと。ロマンチックに思い、私は彼の結婚式の日もう胸は痛まないかと訊いた。彼の笑顔はなぜか悲しそうに見えた。

## 死後

---

「死にたくない」「じいさんもう十分だろ。長者番付に載って、ノーベル平和賞までもらって、百歳まで生きて、その上まだやり残したことがあるっていうのか」「死んでからの人生の方が長い。イエスはもう二千年も磔にされたまま……なるべく長く足掻く。死後の人生を短くするために」

## 父の手紙

---

子供の頃から別れて暮らしていた父が贈って寄越した一冊の本が青春時代の支えだった。十八の歳に届いた要領の得ない手紙は、苛立ちしかもたらさず、二十四で父に会い本の礼を伝えた時、父はわたしを打擲して追い出した。本の半分も有り難みのない手紙を燃やしながらわたしは泣いた。

## 瞳

---

きみのルビーの瞳に、僕の赤い熱情は映らない。ぼくのブルーサファイアの瞳に、きみの青く冷たい嫌悪は映らない。

## 三つの鍵

---

政略結婚の婚約者の謎掛け。「三つの鍵のうち、一つだけあげる。私の心の鍵、貞操帯の鍵、金庫の鍵。さあどれにする？」「心の鍵だ。その扉を開けて、他の鍵は自分から差し出させる」  
「言っておくけど、あげるのは鍵だけよ。扉を開けていいとも、中身をあげるとも言ってないからね」

## 待ち合わせ

---

君はいつも待ち合わせの一時間後にやってくる。駅近くのカフェの前。店には入らない。なぜなら向かいのマックの二階に君がいて、腹を立てる僕や心配して惑う僕を眺めているから。僕は白々しく謝る君が好きだ。僕が気づいていることを知りながら、無表情に見下ろしている君が好きだ。



## 愛を燃やすときには

---

愛を燃やすときは少しずつにしたほうがいい。一気に熱が広がって、燃え尽きた例を知っているから。胃袋がなくなってしまったことを知らずに、食べ物を詰め込み続けるゾンビみたいに、だれかの愛を探しているつもりで、焼け跡の空虚をたださまようだけの哀れな亡霊を知っているから。

## 彼氏いません

---

今日は彼氏と一ヶ月ぶりのデートv仕事の忙しい彼はなかなか会えないから、超気合入れて行った。待ち合わせ場所で彼を待つ。太陽が傾いて辺りが暗くなり、だんだん人がいなくなって、さざれ石のいわおとなりて苔のむすまで彼を待ち続け、やがて考えるのをやめた。#彼氏いません

## 彼氏いません 2

---

「今このカプにはまってるの？」「うん、鬼畜攻め×美少年生意気受けが超たぎるんだー。でも濡れ場がうまく描けなくて」「じゃあ俺が受け実演しようか？」「わたしが攻めでいいの？」「だってお前、いつも攻めに感情移入してるだろ？」その後？ 言わせんなバカ/// #彼氏いません

## 彼氏いません3

---

「彼氏いるの?」「#彼氏いません」「うそー。勿体ないカワイイのにー」恋人のことを聞かれたときは、いつもこう答える。だって、わたしの彼氏は有名人。「ごめんな、普通の恋人みたいにデートしてやれなくて」「いいの。画面越しでもいいの」ハリウッド俳優の彼とはいつもTV電話。

## 視線

---

君は僕と目を合わせてはくれない。近くにいても、話していても、呼びかけても、一瞬だけその視線は僕を横切り流れて行く。逸らすのではなく、流れる。癖みたいに、それが君の常だ。だから僕も移動してみる。衛星のように君のまわりをぐるりと。つかまらない視線と一緒に、君も回る。

「まだ、元カレのことが好きなんだろ。本当のこと言えよ！」「好きじゃないよ」「嘘つけ！」  
「好きじゃないよ。元カレのことも、あんたのことも、いままで誰のことだって愛したことなんてないよ。だから元カレに未練なんかないよ。どう。納得した？」

## 書き出し 1

---

約束数えたら全部破れていました。私に話しかけないで。私に関わらないで。優しくしないで。私を探さないで。そう言っていなくなった君との約束を、また守れそうにありません。だからこの手紙だけを送って一つだけ誓うことにしました。もう二度と君に近づきません。次は、君の方から来て。

@syu\_kugakuさんの書き出し使わせていただきました。「約束数えたら全部破れていました。」

## 書き出し 2

---

あらゆる文脈が剥奪されてしまう、その暗い森の中で、彼は棺に横たえられた少女に出会う。その肌は雪のように白く、その唇はりんごのように赤い。吸い寄せられるように口づけすると、娘は瞼を開いた。「誰、変態！」平手うちを食らって呆然とする彼の周りを小人が踊る。ハイホー、ハイホー！

@chocolatesityさんの書き出し使わせていただきました。「あらゆる文脈が剥奪されてしまう、その暗い森の中で」



## 書き出し3

---

あらゆる文脈が剥奪されてしまう、その暗い森の中で、君に好きだと言おう。悲劇もしがらみも憎しみもなく一人の少女に一目惚れしたただの男として。君は少し照れ、少し恐れる。そして犬に吠えかけられたような無邪気さで、逃げ出していく。追いかけると悲鳴を上げ、立ち竦むうちに見失う。

@chocolatesityさんの書き出し使わせていただきました。「あらゆる文脈が剥奪されてしまう、その暗い森の中で」

## 書き出し4

---

眠たげな朝は急ぎ足でやって来た。八時間だけきっちり働いて、そそくさと帰っていった。まだ早いんじゃないかな、なんていうと残業代だせよ！と怒鳴られた。薄暗い日が増えた。ついに朝は来なくなった。辞表が郵送で送られてきた。かわりに採用した黄昏を見て人は朝は良かった、とグチた。

@synnblueさんの書き出し使わせて頂きました。「眠たげな朝は急ぎ足でやって来た。」

## 書き出し5

---

貴方を想って吐く息は白い雲になることなく、地に落ちた。貴方を想って流した涙は拭われることなく砂を湿らせ、貴方を想って発した言葉は誰に聞かれることもない穴の中に吐き出される。そうして地面に染みこんでいった哀しみが地底湖に溜り、地球の腹を凍えさせて私たちの息を白く染める。

@iolite\_nightさんの書き出し使わせていただきました。「貴方を想って吐く息は白い雲になることなく、地に落ちた。」

## 書き出し6

---

わがままだったキミの、最期のイタズラなのかな？ 郵送した鍵で屋敷に招待して、キミの苦しみを見届けさせたかったのかな？ 床に散乱する白い錠剤を砕き、血の付いたナイフを拾い上げて、宙吊りのキミを見つける。縄を切ってキミを抱く僕の頭上で音がする。シャンデリアが二人を潰した。

@arrival25さんの書き出しお借りしました。「わがままだったキミの、最期のイタズラなのかな？」

## 書き出し7

---

このハッシュタグ面白いけど、出題者に作品を伝えるのがちと難しい。読んでくれるのかな？ 気に入ってくれるかな。ドキドキしながらツイートしたら返事が来た。不正解だって？ 正しいも間違いもあるかよ！ 書き出しは「メロスは激怒した。」走れメロスかよ、クイズかよ！ 俺は激怒した。

@sleepdogさんの書き出しお借りしました。「このハッシュタグ面白いけど、出題者に作品を伝えるのがちと難しい。読んでくれるのかな？」



## 書き出し 9

---

金魚鉢の中で泳いでいるのは金魚ではない。しなやかな君の手首だ。研究室のソファで居眠りする君から盗んだ。飽きるほど眺めてから、盗んだソファの上に捨てた。君は今でも時々その手で頬杖をついてあの犯人は誰だろうねという。ふやけて皺のついた手を残念に思うのは、今も昔も僕だけだ。

@nemu\_tatibanaさんの書き出しお借りしました。「金魚鉢の中で泳いでいるのは金魚ではない。しなやかな君の手首だ。」

## 書き出し10

---

「つけま」が吹っ飛んだ。近年稀に見る春の嵐により栽培種は根こそぎ飛ばされ、目元が貧相になった女性が引きこもったため、都市機能がストップ寸前の状況に陥った。それを救ったのがギャリー（発音不能）である。新種のつけまを開発、秋にはたわわに実ったマスカラの実が女性の目元を彩る。

@OK\_1111さんの書き出しお借りしました。「「つけま」が吹っ飛んだ。」



あなたって人は、いつも人混みの中に隠れて私を困らせるのね。「出てきなさい」声は無視され、人々は無関心に通りすぎる。仕方がない。今日はサブマシンガンを持ってきたし、犠牲は厭わないわ。ただ盲点だったのは、全員が倒れると立っているときよりタチが悪いってこと。あなたって人は。@Yolukuiさんから書き出しお借りしました。「あなたって人は、いつも人混みの中に隠れて私を困らせるのね。」

## 花 1

---

散り際の美しさというものがあります。老いさらばえることなく美しさの絶頂においてはらりと散る。そういう美学を持った種族がおります。そんな解説とともに美しい種族が高い場所に現れた。その細い首が一齐に落ちる。転がり弾み潰れ、血の飛沫がいくらか盃に飛び込む。風流である。

## 花2

---

膨らんだ赤い花弁を優しく指で押し開く。そこには薄緑色の親指大の少女がいる。恥じらうように震える彼女に黄色い粉をなすりつける。この瞬間が最も興奮する。品種改良を重ね、微かな胸の膨らみとなだらかな腰つきを得ためしべ。男はいつの日か彼女が目を見開くことを信じて疑わない。

くしゅん。「風邪？」たまたま放課後に教室で二人きりになったとき、クラスで一番可愛い女の子に声をかけてしまった。「ううん。花粉症」「季節はずれだね。まだ十二月なのに」「夜光草って言って妖精の森の泉の畔にたくさん咲いてるの。昔はよく摘みに行ったんだけど」「妖精の森？」「……まあ、便利なんだけどね」鼻声で言って顔を顰める。「便利？」「扉がね……」そのとき彼女は思案げに僕の顔を見た。悪戯っぽい笑みが浮かぶ。「これ、秘密ね」「え…」困惑する僕を残して彼女は出て行った。その後クラス替えがあり、いつ彼女が学校に来なくなったかを僕は知らない。

## 試験 1

---

「試験が始まるまで、しばらくお待ちください」僕は消しゴムと鉛筆を机に並べ、膝に手を置いて、問題用紙を見るようなこともせずに行儀良く待っていた。試験が終わった。「試験に疑問を持たずに待ってたのはあなただけですよ」「いいんです。誰かを疑うくらいなら、僕はこのままで」

## 試験 2

---

「最終試験は早押し問題です。第一問！」グラグラ！ ピンコーン「震度5弱！」「正解」「深さ20m震源からの距離50kmくらいかな」「装置での再現です。第二問！」グラ……！ ピンコーン「震度3」ブブー。ピンコーン「力士二人」「正解！曙と小錦がジャンプしています」

### 試験 3

---

「ここは天国の門です。あなたに最後の試験を行います。質問に教えてください」金髪の天使がいう。「あなたの母親の最期の言葉は？」「わかりません」「あなたの子供の数は？」「二人」くすくす「不正解。あなたを世界で一番愛しているのは誰？」「.....」くすくすくす「では、開門」

## 試験 4

---

刃こぼれと血糊と錆でボロボロの刀を見るや否や、客は気色ばんだ。「儂になまくらを売りつける気か」「旦那、こいつは試し斬りで残った唯一の刀ですぜ」「戯言を」客が腰の刀を抜く前に刀鍛冶が動いた。刀身は粉々に碎け散り客は無傷のまま倒れた。千の血を吸い未だ斬れ味を失わぬ。



## 試験 5

---

「すみません、何処に行けば試験を受けられますか？」「試験？ そんなものないよ」「ないと困るんです」「そんなこと言われてもねー。ないものはないんだからさ。困るって言ったって、他の人はなくてもなんとかやってるじゃないか」「でも……受けないと、証明できないんです……」

## 賞

---

みんな生っ白いメガネにムカついて選考委員をやめたと思っているだろうが、そうではない。別の筆名で小説を書いて賞を取り、目にももの見せてやるためだ！ おれは口だけでなく辞退するぞ！「受賞者は二人います。一人目は齋藤智裕さんです。コメントをどうぞ！」「辞退します」

## 本命 1

---

「おれの恋人を惑わしたのはお前だな！」憎しみの刃が悪魔の胸を貫く。「残念だな、私の本当の命は右胸に……」瞬間、背後から何者かの短剣が悪魔の心臓をとらえた。彼の恋人だった。「おれのところに戻ってくれるのか」「わたしの本当に愛する人は……」恋人は二人を残して去った。

## 本命2

---

本命チョコは恥ずかしい...ならばクラス全員に義理チョコをあげて一人だけあげなければいい！  
逆転の発想の勝利！ほーら、あなたは私のことが気になって仕方がなくなーる！...十年後同窓会  
にて。「お前なこと酷いと思ったけど、お陰で悲しんでる俺にチョコくれた彼女と付き合い始  
めて」

## 本命3

---

「ストーカーでの補導経験あり。愛しさ余って被害者を刺したってわけか?」「いいえ、あたしたちの仲を邪魔しようとしたから殺しただけ」「じゃあ、こいつは?」「そいつも同じ」「じゃあ」「ねえ刑事さん? あたしの本命が誰か本当にわからない? 何のために捕まったと思って?」

「今日のぱんつ何色？」「実は知らないの。目をつぶって選んだから。観測されるまでは何色が確定してない」「僕が確定していいの？ シュレーディングーのぱんつ」「うん」彼女は恥じらいながらスカートをたくし上げた。そんな少しの工夫で見慣れたぱんつも特別になる。「裏表逆だよ」

「今日ぱんつ何色？」「君は本当に私のぱんつの色が知りたいのか。毎日ぱんつの色をメールしようか。それでも知りたいと思うか」「し、知りたい」彼女は不敵に微笑んだ。男性心理を読み切ったつもりなのだろう。だがその程度で我々の探究心は抑えられない。「今日のぱんつ本当に白？」

## サブアカ

---

新しいフォロワーに影響されて、古い付き合いのあるフォロワーと意見が合わなくなってきた。ある話題で激しくリプライの応酬をした後、ついにお互いブロックしたが相変わらずツイートは読めるのでイライラは収まらない。俺はアカウントを切り替えると空リプで反対意見を書き込んだ。



## 仏像

---

僧は、淫欲に溺れた女を世間と隔絶した山荘に住まわせ仏像を彫らせた。男を断ち無心に像を掘り続けた女の顔は晴れ晴れとしていた。「お坊様のお陰で己の欲望と向き合うことができました」山を下りた女の手には、顔のない仏像がしかと握られていた。それは世にも立派な男根であった。

う.....

---

どこへ行っても異臭がついて回る。消臭剤をかけても、着替えても、臭いは消えない。もし臭いのものが自分なのではないのだとしたら.....俺はトイレに駆け込み、息を殺した。何かが俺に付きまとっているなら、その正体を確かめてやる。「ああ...！」そういえばパンツは変えてなかった。

「奴ら」は自分たちの食いを人がxx呼ばわりするのを嫌って言葉を禁じたがxxはxxだ。良質のxxの安定的供給には、規則正しい生活、バランス良い食事、程よい運動が必要だ。それができる俺はいわばエリート家畜。他の連中とは扱いが違う。それがさらなる生産性の違いを生む。

同族は既になく、両親が息絶えたのち男は果てのない荒野に足を踏み出した。鼠より大きな生物の存在は骨でしか知らなかった。陽炎の先に動く影を見た気がして、彼は走りだした。足が滑り地面に倒れ伏す。足元を振り返り目を見開く。「これは...うんこ！」それはまだ生温く湿っていた。

## 感情

---

「今のあなたの発言ですけれども、少し感傷的じゃなかったかしら」「そうでしょうか。彼の立場を考慮しただけですが」「いいえ、同情しているように見えました。意見に感情が入り込んでいます。今のあなたの判断力には疑問がありますわ。この場での発言の禁止を要請します」「……」

## 吐瀉物

---

噛み砕いて噛み砕いて吐き出した言葉が吐瀉物のように地面に垂れ流されて、周囲の人たちはとたんに遠巻きにして眉を顰めた。彼も惨めな顔でそれを眺めた。

同士

---

このツイートを見ているだれかさんが、あなたを食べたいそうです。食べたい同士になりませんか？

## 化石

---

彼は地層から化石化したそれをそっと掘り出した。まだ土を被ったままのそれをハケで清めようとする。「ちょっと待って!」「どうして? これは君が中二のころ大切にしていたものだろう?」「それはまだ新鮮だった頃の話よ。干からびてもう見る影もない。夢を壊さないで頂戴」「.....」



## 彫刻

---

その彫刻を見た者は、必ず感動で涙を流した。なぜなら、誰もが彫刻に込められた作者の切実な想いを知ると胸を打たれたからだ。作者は自らの遺作が未完成に終わることを嘆いて、美術館に飾るときには詳細な解説を施した。人々は完成させることのできなかつた作者の無念に涙を流した。

## フォロワー 0

---

ツイッターが壊れて、タイムラインが動かなくなってから三ヶ月。もう無理かなと諦めかけたとき、気づいた。壊れたのはタイムラインじゃない。フォローフォロワー表示だ。

## ブロック

---

ついに全ての人からブロックされてしまった。誰も僕と同じ時間と空間を共有したくないのだろう。仕方なく止まったタイムラインを眺め続けていると昔相互だった子がフォローしてくれた。少し話すと彼女は顔を顰めた。何年も経ったのにあなた何も変わってないのね。そして僕はまた一人。

## 研いだナイフ

---

よくよく研いだナイフで文章を削る。余計なものはいらない。贅肉はそぎ落として、必要最低限の言葉だけを残して……あっ。切れ味が良すぎて、文の途中 残りは失くしたし。今度は慎重に七刀る。あっ、手が滑って今度は文字が真っ二つに！ めげずに削っていく。あっ、削りす——

。

## 感想メール

---

殺さないで！ という読者からの熱烈なメールで、仕方なく死んだキャラを生き返らせた。それからキャラが死にそうになったり話が終わりそうになる度にメールがくる。永遠と思われるほど長い間続く、物語と感想。もはや主人公はゾンビだ。そうか、あなたの正体は.....そしてわたしも。

## 視点

---

彼はつまらぬ男である。無知で無学でそのくせそれに気づかぬほど傲慢であり、偏見に満ち、自分の理解できないものは徹底的に見下し、自分に都合のよいことは取り上げ、そうでないものは無視する、透明な男である。さて、視点を定義したところで物語を始めよう。なに？ 帰るだって？

## 冷たい部屋

---

冷たい部屋は冷たい。冷たい部屋で冷たい朝を待ちたくはない。冷たい身体を抱えて冷たく凍えながら冷たい塊になってうずくまる。冷たさは心を震えさせる。冷たさは感覚を奪い取る。冷たさに侵され、石のように同化した、もはや冷たくない身体を出る。だれもない部屋は冷えていく。

## 意味

---

響きの美しさから娘は何度もその音を叫んだ。知らぬ間に忍び寄り混じり込んだものにも気づかずに、無心に繰り返されたその音はいつしか言葉となって意味が生まれ人々の頭に概念を刻んだ。娘はそれを己の頭が生み出したものと思い込み、長らく人々は何かを考えていると誤解し続けた。



## 裁判

---

○月×日3時34分AはBを現場にあった包丁で殺害後、自ら警察に通報。警察官が凶器を手にしたAを拘束。現場にはAとB以外の人間のいた痕跡はなかった。……二人の関係？ 予断を与える情報は言えません。え、動機？ それは殺害の事実を揺るがし得るものですか？ では判決を！

世界は愛に。

---

世界は愛に包まれていた。彼はたくさんの人々の想いに背中を押されてその一歩を踏み出した。大いなる地球の重力が彼を優しく引き寄せ、風が慟哭するように強く彼を包み込む。そして彼は勢い良くアスファルトに激突し潰れた。世界は愛に包まれていた。物理法則に介入することなしに。

## 模様替え

---

ある富豪が模様替えをするのに業者を呼んだ。高価な壺や絵画を移動するので、美術品を扱う専門業者だったのだが、終了後何故か作業員がみんな黙りこくってしまった。新人だけが無邪気に不思議がる。「おまえ、気づかなかったか？ 重かっただろ。壺も甲冑も、全部、中身が入ってた」

## カナリア

---

Aのあだ名はカナリアだった。いい声で鳴くから……ま、それも間違いじゃないけど。みんながやりたくないことを率先してやるから。空気を読むんじゃなくて吸って、一番に死ぬから。いじめじゃない、あのときも自分から飛び降りたんだ。そして、ここは安全だからおいでって言うんだ。

## あしあと

---

朝起きた時には既に新雪は汚されていた。早起きな寮生もいるものだと毎夜積もった雪に律儀に足跡をつける誰かに感心していた。ある日足跡を辿って初めてそれが何処にも続かないと知った。足の下雪は溶けるはずもないのに黒い地面を覗かせている。目を上げると先は崖になっている。

## 夜這い

---

リア充が爆発し絶滅の危機に瀕した人類は這い制度を作った。夜這いするのは女性側なので引きこもりでも問題ない。コンコン。今夜もだ。夜這いで初めて俺はリアルな女性とは映画やアニメと別物と知った。あれは男の願望の産物。白く巨大で美しい「本物」を俺はうっとりしながら招く。

## ダメな自分

---

ダメな自分と決別しようと思った時、身体の裏側から何かが剥がれ落ちた。尻餅をつき、裏切られたような表情をしたもう一人の自分。以来人生は順風満帆に進んでいる。家族と暮らす一軒家の窓の外、路上からこちらを見上げる落ちぶれた自分と目が合う度、心から幸せを感じるのだから。

## 香り

---

かぐわしい香りを放つ女がいた。香水は何かと問うと使っていないという。柔軟剤の所為かと思  
い脱がせてみると、肌から香ることがわかった。だが浴室にそれらしき石鹸もボディ・オイルも  
ない。皮を剥いで纏い、やっと香りを手に入れる。その日からやけに男からデートの誘いを受  
ける。



## 夜 1

---

「もう帰ろうよ」声をかけた途端、君は滑り台に向かって駆け出していた。次はブランコ。次は平均台。公園を一週して滑り台に登った君にやっと追いつく。「まだ明るいよ」元気な声で言う君の手を、半ば手探りで握る。その冷えてしまった手を。

#夜という文字を使わずに夜が来たを文学的に表現してみろ

## 夜 2

---

明かりのせいだ。昼間から煌々と灯されたあの人工の明かりのせいだ。見えているのに、目に入らない。気づくと背後に忍び寄っている。

#夜という文字を使わずに夜が来たを文学的に表現してみろ

## 夜3

---

腹から熱が奪われていく。寒気が背中を這い上り、目の前が暗くなっていく。「あれ？ もう日が暮れたんだ？」瞼が重い。とても眠い。「そう、眠る時間だよ」固い地面に横たえられる。少なくともそれは嘘ではない。相手の長い影だけが見える。

#夜という文字を使わずに夜が来たを文学的に表現してみろ

## 手

---

身体を支えるザイルが切れ、空中に身体が投げ出される。先に行く彼が振り返るのが目に入り、おれは必死に手を伸ばした。「ファイトー！」「いっぱーつ！」

#手を繋ぐ描写してみようぜ

## キス

---

あどけなく微笑む少女というのは、河原の石ころに混じった宝石の原石のように見えて、磨こうとするこちらの下心を見透かすように息を吹きかけただけで輝きだしてしまう。とすれば、我々にできるのはただ荒々しく奪うだけだ。「おじ様今何をしたの。速すぎてわからなかったわ」

#キス描写してみようぜ